

# 「主体的・対話的で深い学び」の視点を明確にした授業づくり

## ～対話的な学びの充実につながる校内研究支援～

副主査・指導主事 西谷地力也  
主査・指導主事 小林 美佳  
副主査・指導主事 坂本 久美

副主幹・指導主事 天野秀太郎  
主査・指導主事 宮下 昌久  
副主査・指導主事 三枝 朋佳

キーワード 全国学力・学習状況調査分析結果の活用 授業改善

### 研究の概要

研究推進校(山梨県総合教育センターが校内研究を支援・サポートする学校 以下推進校)における授業改善の支援の在り方に関する研究を行い、「主体的・対話的で深い学び」の視点を明確にした授業づくりに寄与する。研究期間は2年間で基本とし、今年度はその2年目である。

中学校チームの研究主題と副主題は、次のとおりである。

「主体的・対話的で深い学び」の視点を明確にした授業づくり  
～対話的な学びの充実につながる校内研究支援～

推進校の研究主題及び副主題は、次のとおりである。

### 甲斐市立双葉中学校

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善  
～生徒の対話機会の充実を目指した教育活動の工夫と改善～



図1 双葉中学校

### I 主題設定の理由

各学校では、学校の特徴を生かした校内研究を推進しているが、教育課題が多様化・複雑化する

教育現場において、校内研究の運営に多くの学校が様々な悩みを抱えており、研究の成果が教員一人一人の授業改善につながっていないという現状がある。そこで本研究では、校内研究支援の在り方を探るにあたり、「主体的・対話的で深い学び」の視点を明確にした授業改善につながる校内研究に着目することとした。

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を行うには、生徒の実態把握が欠かせないため、全国学力・学習状況調査(以下「全国学調」)の結果分析を、改善のためのツールとして用いていくこととした。結果分析を通して、授業者が自身の授業を見直し、授業改善につなげることができ、目的を明確にした授業づくりに結び付くと考えた。

### II 研究の目的

教員一人一人の主体性の向上と授業改善につながる校内研究が、推進校を含めた多くの学校において実践できるよう、学校の特徴を生かした実践に寄与するとともに、事例の蓄積を通して、本センターのシンクタンク機能の充実を図る。

### III 研究の方法

本研究の方法は以下のとおりである。

- ・山梨大学と連携して学力調査の結果を分析し、それに基づき授業者と課題を共有し、協働しながら生徒の実態に沿った授業づくりを推進していく。
- ・学習会、指導案検討、研究授業、研究会における指導助言の方法や内容等について協議する。
- ・先生方が自分自身の変容を自覚できるように、Google Classroomを利用し、教員同士が相互に確認し合える校内研振り返りシートを活用する。また、その記述とアンケートの結果を検証の手立てとする。

## IV 研究の経緯および結果と考察

### 1 研究の経緯

本年度の推進校への支援は以下のとおりである。センター指導主事と後述する「データ分析 WG」のメンバー（山梨大学教授、准教授）が連携し、継続的な支援を行った。本センター指導主事による推進校への訪問人数は、延べ29人であった。

#### (1) 双葉中学校への主な支援

4月21日(金)

- ・研究についての打合せ

6月19日(月)

- ・校内研究主題に関する学習会

7月10日(月)

- ・英語科授業参観

8月21日(月)・8月22日(火)

- ・教科学習会(数学・国語・英語)

9月28日(木)・10月2日(月)

- ・指導案検討会(数学・国語・特活・英語)

10月31日(火)

- ・拡大校内研究会(数学・特活・英語)

#### (2) 山梨大学との連携による支援

本県では、「山梨県教育委員会と山梨大学教育学部との連携協議会」を立ち上げている。この連携協議会内には、本県学力向上に向けて、学術的な知見を得ることを目的として「データ分析 WG」を設置している。

5月22日(月)

- ・第1回WG

5月～6月

- ・双葉中学校の全国学調の早期分析(数学・国語・英語)

8月21日(月)・8月22日(火)

- ・教科学習会(数学・国語・英語)

8月31日(木)

- ・第2回WG

9月13日(水)

- ・第3回WG

9月28日(木)・10月2日(月)

- ・指導案検討会(数学・英語)



図2 部会の様子

10月31日(火)

- ・拡大校内研究会における指導助言

11月17日(金)

- ・第4回WG

全国学調の早期分析を生かした研究授業や学習会へ直接出向いていただき、大学の先生方から指導助言をいただくことができた。

### 2 支援の具体

#### (1) センターによる支援

推進校が校内研究を進めていくうえで、必要となる支援を、センター支援主担当が双葉中学校研究主任と相談しながら考え、適宜設定した。設定する際は、推進校の主体性を大切にしたい。

今年度行った主な支援は、以下の3つである。

ア 校内研究主題に関する学習会

イ 指導案検討会の実施(特別活動)

ウ 拡大校内研究会に関わる支援

#### ア 校内研究主題に関する学習会

今年度、双葉中が校内研究で目指す「生徒の対話機会の充実を目指した教育活動の工夫と改善」に関わって、本センター指導主事2名が学習会を行った。

前半は、「対話(話し合い)」のための土壌づくりとして、相談支援センターの小野指導主事より、生徒が自己有用感を実感することのできる学級集団づくり(学級経営の充実について)について講義を行った。

<主な講義内容>

- ・自己肯定感と自己有用感の違い
- ・「ほめる」と「承認」の違い
- ・行動論的アプローチについて
- ・構成的グループエンカウンターについて

後半は、合意形成を軸とした話し合い活動について、特別活動を中心に、宮下指導主事が、特別活動の特質及び特別活動の内容の構成と指導で留意するポイントについての講義を行った。

### <主な講義内容>

- ・学級活動における学習過程について
- ・自分たちで考え、話し合いを通して合意形成し、協力する活動について（フリートーク）
- ・意図的な指導や話し合うことで互いの距離を縮める活動を行うことの大切さについて

### 研究会後の校内研振り返りシートより

- ・対話をするためには、人間関係ができていないと難しい。学級づくり，人間関係づくりのヒントを教えていただきありがたかった。
- ・日頃から一番近くにいる担任が子どもたちと同じ目線にたって，話をしたり，聞いてあげたり，みてあげたりすることが大切だと思った。フリートークをぜひやってみたい。
- ・周りとの関わりを増やすことが，自己有用感を高めるきっかけになることがわかり，「対話」の大切さについて学ぶ機会となった。

2名の指導主事による講義を通して，対話の素地づくりとなる，学級集団づくりの大切さを改めて確認したり，合意形成のための手法について学んだりする機会となった。

翌月の，校内研では，6月の学習会をもとにした校内研究会が実施され，双葉中の先生同士で実際に対話的な活動に取り組む中で，対話の意義や，教科指導における課題設定や問いの質の重要性について確認された。



図3 講習会の様子



図4 講習会の様子

### イ 指導案検討会の実施（特別活動）

今年度双葉中学校で進めている「対話的な学び」の研究を生かした授業を目指し，拡大校内研究会で公開する授業についての指導案検討会を実施した。

授業のねらいを達成するための話し合いや意見集約の方法を中心に検討をした。授業が拡大校内研の前週に行われる「職場体験」をもとに構成されているため，本時のねらいを踏まえて「どのように職場体験に臨ませるのか」「事前指導では何をおさえるべきか」ということまで話が及び，有意義な検討会となった。

### ウ 拡大校内研究会に関わる支援

(2) 山梨大学との連携による支援のウ 拡大校内研究会を参照

### (2) 山梨大学との連携による支援（データ分析WG）

本センター指導主事及びデータ分析WGが連携し，全国学調（数学・国語・英語）の結果分析に基づく提言を行い，授業者と協同で研究授業の単元を設定した。調査結果から明らかになった生徒の実態に沿った授業づくりを授業者と相談しながら推進し，その際も，推進校の主体性を大切にした。

今年度行った主な支援は，以下の3つである。

- ア 全国学調の分析を踏まえた学習会の実施（数学・国語・英語）
- イ 指導案検討会の実施（数学・国語・英語）
- ウ 拡大校内研究会に関わる支援

### ア 全国学調の分析を踏まえた学習会の実施（数学・英語・国語）

数学科，英語科，国語科において，令和5年度全国学力・学習状況調査の早期採点の分析結果を踏まえた授業改善のための学習会を実施した。山梨大学教授，清水宏幸先生（数学），田中武夫先生（英語），齋藤知也先生（国語）より分析結果と授業改善のポイントについての指導助言をいただいた。各教科で，校内研との関わりも含め，意見交換を行い，10月の拡大校内研に向けて，指導案や今後の授業等について検討した。

数学科では，今年度と昨年度との比較をしながら，課題が見られた問題の詳細な分析結果と課題解決に向けた指導のポイントについて，指導助言

をいただいた。英語科、国語科では、分析結果から見られる課題と、課題解決に向けた授業改善の方法について、指導、助言をいただいた。具体的な言語活動例や具体的な教材をあげて丁寧な説明をいただいた。

### 研究会後の校内研振り返りシートより

- ・ 解答を求める力ではなく、与えられた式や図（グラフ）がどんなことを表しているのかを考え、表現する力が必要であること。これは今年度の研究テーマにある「対話」ともつながれそうな内容になっていた。
- ・ 教え合いになりがちな教科の授業を、「この解にたどり着くまでにどんな方法が考えられるか」と問い方を少し変えるだけで、これまでとは全く違った授業展開になるのではないかと感じた。
- ・ 「どのように求めることができたのか」という問いは、言葉で説明することが難しい。だからこそ、普段の授業から意識して問う機会を設けたいと感じた。

学習会を通して、先生方の中で校内研究の対話的な学びと学習会の内容が結びつけられ、授業改善の具体的な手立てについて考える機会になった。また、普段先生方が考えていることやどのように普段の授業につなげていくかについて交流することで、より分析内容を今後の実践と結びつけて考えることができた。

### イ 指導案検討会の実施（数学・英語・国語）

全国学調の調査結果の分析及び今年度双葉中学校で進めている「対話的な学び」の研究を生かした授業を目指し、拡大校内研究会で公開する授業についての指導案検討会を実施した。検討会（数学・英語・国語）には、双葉中学校の各教科担当の職員、センター教科担当指導主事、各教科を担当する山梨大学教授が参加した。

#### <数学>

授業の導入において、生徒が問題を自分事として考えられるように、小学校の学習内容や単元及び前時の学習内容とのつながりについて考えながら指導案検討を行った。清水教授からは、全国学力・学習状況調査で見られた課題を踏まえた上で、問題の数値や条件・場面設定の仕方等、題材づくりについて指導助言をいただいた。問題づくりの

授業にしたことで、単に解答を求める力ではなく、与えられた図（グラフ）がどんなことを表しているのかを表現する力が求められ、対話的な学びの充実につながれるということが確認された。

#### <英語>

まとまりのある文章や会話を読ませる際の教師とのやり取りや発問の工夫、またそこからのアウトプット（理由や根拠、自分の考えを持たせる、まとまりのある文章を書くこと）についての授業改善に向けた指導案検討を行った。発問の種類や問う順序の工夫などについて田中教授から指導助言をいただいた。校内研との関わりも含め、教師と生徒の対話、生徒同士の対話場面をどう仕組んでいくかについて検討した。

#### <国語>

「読むこと」の授業において、生徒たちが教材文のもつ魅力（表現の工夫など文章の優れている点）を発見していくような授業を目指して、意見が交わされた。そのためには、授業者自身が教材の魅力をも十分に理解すること、初読では読み飛ばしてしまうような部分に探究の鍵があることなど、多くの視点を齋藤教授よりご教授いただいた。双葉中の学調結果分析も踏まえ、文章における部分部分の表現をセットで考えさせることができるような授業展開が重要になることが確認された。

### 研究会後の校内研振り返りシートより

- ・ 研究授業で扱う単元について、展開の仕方や視点などを話し合った。他の先生の意見を聞いて勉強になった。
- ・ 授業の中で、意識して問いかけを行っていると思っていたが、まだまだ少なかったのだと実感した。
- ・ 授業を組み立てていく上で生まれたモヤモヤ感を解消することができた。

今後の授業改善につながる学習会となった。若年層の先生方にとっては、他の先生方の考えや授業の視点等を学ぶ機会にもなったと感じる。この指導案検討会で学んだことにより今後の実践意欲が高まっている様子も感想からうかがえる。



図5 検討会の様子

## ウ 拡大校内研究会に関わる支援

全国学調の結果を踏まえて、数学（1年）、特別活動（2年）、英語（3年）の3教科の授業を実施した。数学、英語については、全国学調の分析を依頼した山梨大学の清水教授（数学）と田中教授（英語）にもご指導いただいた。お二人の先生には、拡大校内研の研究会においても指導・助言をいただいた。特別活動については、6月の学習会の内容やクラスの実態に合わせて、校内研究主題である対話活動を工夫した授業を行った。

近隣の小・中学校や高等学校の教員及び今年度新たに研究主任となった教員など、64名がそれぞれの分科会に分かれて参観した。

<第1学年：数学>

単元名 「一次方程式」

- ・与えられた図から必要な情報を適切に読み取ることに課題が見られる。
- ・図（グラフ）と具体的な事象とのつながりに気付ける授業を構想する。

これまでの学習会や指導案検討会等であがった上記の内容を踏まえて、与えられた図（グラフ）の意味を考えながら問題づくりに取り組み、方程式を用いて解決することを通して、図と1次方程式のつながりを理解し、その考えを深める授業が行われた。生徒たちは、図の意味する事象を問題づくりを通して表現し、対話活動を通して考察する中で考えを深めていった。



図6 研究授業の様子



図7 研究授業の様子

<第2学年：特別活動>

「キャリア教育」

- ・お互いの本音を出し合い、合意形成を図る（対話する）ことに苦手意識が見られる。
- ・職場体験を学校生活に生かすため、対話を通して自分の考えを確かなものにしていくことをねらいとする。

これまでの学習会や指導案検討会等であがった上記の内容を踏まえて、職場体験の経験を基に、「仕事をする上で大切なこと、必要な力」についてそれぞれが考えたアンケート結果の中から学級全体で8つの力を確認し、それぞれの力を「学校生活のどのような場面で高めていけるか」について、対話を通して考える授業が行われた。



図8 研究授業の様子



図9 研究授業の様子

<第3学年：英語>

単元名 「Program5 The Story of Chocolate」

- ・「文章の概要や要点、必要な情報を捉えて読むこと」「考えとその理由を、事実と具体例を踏まえてまとまりのある文章で書くこと」に課題が見られる。
- ・教師と生徒、生徒同士のやり取りを重視したReadingの授業改善に取り組む。事実発問・推論発問・評価発問を使い分け、生徒の思考を促す発問を工夫する。

これまでの学習会や指導案検討会等であがった上記の内容を踏まえて、英語でのやり取りを通して教科書本文の概要を捉え、印象に残った文とその理由を具体例とともに、まとまりのある文章で書いて伝え合う授業が行われた。発問を工夫し、読み取った内容に関する生徒の考えを尋ね、その理由や根拠を書いて伝え合う中で考えを深めたり、表現を広げたりしていた。

事後研究会は、教科ごとに研究会を行った。研究会では、進行係が協議の進め方を説明した後、マンダラートを用いて、小グループに分かれて協議を行った。新研究主任をはじめ、外部からの参加者もあったため、マンダラートを用いることで討議が活発に進んだ。



図10 研究授業の様子



図11 研究会の様子

以下は、授業者の校内研振り返りシートと参加者のアンケートの記述である。

### 授業者の振り返りシートの記述より

#### 1年 数学

・生徒同士の対話について、こちらの想定外の発言もあり、柔軟に対応することに難しさを感じた。授業の目標に到達するためには、計画的に時間配分をしてすすめることが必要だが、対話が始まると対話をまとめることができず、時間がかかってしまい、授業が計画どおりにいなくなることもある。これからの課題だと感じた。

#### 2年 特別活動

・対話によってつくられる授業を行うことができた。対話をしないと進んでいかないような授業をすることは、不安もあったが、1時間の中で生徒の新たな姿をたくさん見つけることができ、やって良かったなと思えた。対話は特別なものではなく、必要だからこそ仕組みでいくものと思っ授業をつくっていききたい。

#### 3年 英語

・指導計画や評価、ワークシートの内容等、細部にわたってご指導をいただき、特に、生徒たちのやり取りがより充実したものになったことを実感した。全国学調における課題分析を元に授業の方向性をアドバイスいただき、常にその課題意識をもって発問内容等考えられたことで、生徒たちの実態に即した、かつねらいに迫ることのできる授業展開にすることができた。

### アンケートの記述（参加者）

#### 参加教科：数学

・研究1年目の課題を発展させた研究内容になっていたと思う。また、研究内容が対話に焦点を絞っており、先生方にも研究が浸透して、研究を深めることに繋がったことが伝わってきた。

#### 参加教科：特別活動

・対話的な学びの土台としての学級づくりの重要性を再認識できた事。対話をするためには、自分と違う意見が出てきた時の対話の深め方のやりとりのテンプレートの必要性も感じた。そして、それ以前に、このクラスでならどんな意見を言ってもまずは受け止めてもらえるという心理的安全性があることが、対話を深める鍵になる事に気づけた。

#### 参加教科：英語

・対話を通し、考えを深めたり、根拠を明確にしたりするためには、教材の提示の仕方、教師の問い返しなどが大切になると改めて感じた。また、学級の雰囲気や教師と生徒との信頼関係、生徒同士の繋がりなど、対話の基礎となるものがしっかりしていると、より深い対話が可能だということもわかった。

それぞれの教科で、生徒が直面している課題に対し、工夫を凝らしてアプローチする授業を実施することができた。子どもの実態に即しながら校内研究主題に迫る授業を展開することによって、授業者の先生方にとっても、学びの多い校内研究会となった。

### (3) 校内研振り返りシートについて

校内研究会における、教員の毎回の学びを蓄積するために、校内研振り返りシート（全職員で振り返り考えるシート）を用意した。シートは、校内研用 Google Classroom を作成し、全職員で共有できるようにした。内容は、各校内研究会の終わりに、

研究主題の実現に向けて、各回の校内研を通してわかったことや気付いたこと、考えたこと

を自由にスプレッドシートに記入するというものである。

振り返りシートは、共有状態で編集しているので、リアルタイムで教員同士がお互いのスプレッドシートの編集内容を確認できるようになっている。シートには、年度当初と年度末で、「研究主題を実現するための考えを記入」する欄を設け、同じ内容を問うことで、研究主題の実現に向けた意識の変容がわかるようにした。

### V 研究の成果と課題

#### 1 「データ分析 WG」の研究支援による授業の変化（数学）

山梨大学の清水教授が、2年にわたり双葉中学校の全国学調分析を行うことで、下の課題が見えてきた。

- ・数学的な表現を用いて理由を説明すること
- ・数学的表現を読み取ること

この課題を受け、今年度は、特に「必要な情報を適切に読み取ること」に焦点を当てた授業について検討を重ね、拡大校内研の授業へとつなげた。以下は、双葉中学校の数学科の先生のアンケートから見られた、意識の変化と授業の変化に関する記述である。

#### アンケートの記述（意識の変化）

- ・分析結果を日々の授業改善に生かそうとする意識が高まった。
- ・教科学習会で、分析結果をもとに今後の数学科として授業改善の方向性を議論することは、教材観や指導観の向上につながる重要な機会であるという認識が高まった。

#### アンケートの記述（日々の授業の変化）

- ・教科学習会で題材づくりを学んだことで、日々の授業で問題の数値や条件・場面を変えたりするなど、生徒の実態に合わせて問題を作成するようになった。
- ・授業の導入において、生徒が問題を自分事として考えられるように、問いの工夫を行い、これまで以上に生徒の興味関心を高める授業づくりを心がけるようになった。
- ・経年的な課題である数学的に説明する問題を定期試験に入れるなどして課題改善の状況を確認するようになった。定期試験後は、誤答から生徒のつまづきを見だし、課題の見られた問題を取り上げて解説したり、日々の授業を再度見直したりするようになった。

生徒の誤答からつまづきを見出すことで、育成したい資質・能力を明らかにし、日々の授業で生徒の実態に応じて問題の数値や条件・場面を変えていることがうかがえる。また、生徒が問題を自分事として考えられるように、問いの工夫等を行い、生徒の興味関心を高める授業づくりを心がけていることがうかがえる。

## 2 研究支援による校内研究の変化

双葉中学校の校内研究の活性化や校内研究主題の実現を目指し、双葉中学校の研究主任が校内研究を進めるうえで、適宜センター担当指導主事が相談に応じたり、資料提供を行ったりした。

以下は、本センターが実施した支援によって校内研究に変化が見られた点についての研究主任のアンケートの記述である。

#### アンケートの記述（話し合いの手法についての資料提供や実際の校内研での思考ツールを用いた演習による変化）

- ・話し合いの手法について学んだことで、校内研における協議方法を工夫するようになり、先生方同士で行う協議の質が高まった。
- ・演習を通して学習会等を仕組む側の視点を学んだことで、より質の高い学習会の運営ができるようになった。
- ・一部の教師だけではなく、学校全体で思考ツールを授業で生かす場面が増えた。

提供した資料や本センターが実施した学習会から、研究主任が課題に対するアプローチの方法等について学び、それらを自分が校内研究会を運営する際に生かしていることがうかがえる。研究主任自身が校内研究の質の高まりを実感していることもうかがえる。

#### アンケートの記述（学習会等の実施による変化）

- ・5月に「生徒が自己有用感を実感することのできる学級集団づくり」についての講義を聴くことで、対話そのものみに注目するのではなく、対話の土台づくり（安心安全なクラス環境・集団づくり）の意識も高まり、その後の研究につながった。
- ・教科学習会を通して、主発問や対話をどう仕組むのか、生徒の課題を把握するために分析結果を生かそうとする意識が生まれた。課題が明確であることで、普段の授業の授業構成や課題設定に生かすようになった。
- ・授業案検討会等大学教授やセンター指導主事を含めた公開授業の検討を通して、授業観や教材設定の意識など新たな知見を得ることができた。学校での教科部会だけでは、深まらない部分が深まった。

学習会を実施することにより、校内研究を推進していくうえで必要となる知見が得られ、校内研究の質が高まっていることがうかがえる。教師一人一人の授業改善にとっても、良い影響を与えていることがうかがえる。

#### アンケートの記述（研究主任とセンター担当指導主事による様々な校内研究の実施に関わる打ち合わせによる変化）

- 研究主任1年目としては、校内研究の進め方について見通しをもつことができた。
- 講師の相談、講師の招聘等は研究主任だけではなかなかできないため、専門性のある先生の学習会を通して、研究の質が高まった。
- 2年目は、1年目の経験を生かして研究のビジョンが明確に描けるようになった。
- 校内研究の素地づくりや前年度の課題を踏まえた継続的な研究をすることができたので、先生方一人一人の校内研究に対する意識の向上につながった。

研究を進めていくうえで、研究主任の悩みや課題を共有しながら、適宜、指導助言を行うことで、研究主任が自信を持って校内研究を運営できるようになってきていることがうかがえる。2年間で、研究主任の成長が見られる。

年間を通して、学校の課題を共有しながら協同で研究を進めていくことで、課題に対するアプローチの方法等、研究主任が様々な知見を得ることができ、校内研究の質の全体的なボトムアップを図ることができた。また、先生方は、一つ一つの学習会を通して、専門的な内容を深く学ぶことで、より具体的に日々の授業改善につなげることができたのではないかと考える。

### 3 本年度の校内研究を通じた教師の変容

以下は、ある教師の1年間の校内研究振り返りシートの記述と考察を月ごとにまとめたものである。

#### 研究主題を実現するために（年度当初の考え）

なんとなく使っていた（あまり使っていなかった？）対話という言葉は今後、考えて使っていきたいと思う。



5月 対話という言葉をこれまであまり使っていなかったので、意味を理解した上で使っていきたいと思う。

- 双葉中学校で目指す対話について自分なりの理解をしている



6月 自己有用感という言葉をはじめて聞いた。自己肯定感よりも、他との関わりが強い言葉のように感じた。対話的な活動を仕組む中で、自己有用感の獲得、向上につなげていきたい。

- 対話を生み出すためのベースとなる学級づくり・集団づくりについて考えを広げている



7月 対話にはある程度のスキルが必要だと感じた。良い対話にしていくためのスキルを獲得させる方法についても考えていきたい。ファシリテーターは難しい役割だなとあらためて感じた。

- よりよい対話を生み出すためのスキルについて考えようとしている



8月 対話の場面をどのような形で授業の中に仕組んでいくか、様々な方法があることを感じた。また、対話がスムーズに進んでいくように、生徒の思考をどのように「見える化」していくかもポイントになると感じた。

- 実際の授業を想定する中で、どのように対話を仕組むのか具体的に考えている



9月 正解が対話の出発点という話が印象に残った。ついつい、対話を通して正解にたどり着かせようと考えてしまう。そうではなく、対話を通して正解をどこまで深く掘り下げていけるかという視点を持つと思う。

- 対話を深い学びにつなげるための視点について考えている



10月 対話によってつくられる授業を行うことができた。対話は特別なものではなく、必要だからこそ仕組んでいくものと思って授業をつくっていききたい。

- 授業における対話の意義について再確認するとともに、これからの授業に対する展望をもっている



#### 研究主題を実現するために（今年度の研究を終えた時点の考え）

対話機会を充実させることで、生徒の考え方や価値観がより深くなっていくことを感じた。ただ、無理にその機会を作ろうとするのではなく、1つの手段として対話を使っていければいいんだと思う。有効な場面で対話を取り入れていきたい。

また、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて対話機会の充実を意識するようになった。対話の価値が少し実感できたことで、自分自身がワクワクしながら授業づくりができています。



年度当初の考えを見ると、今年度の主となる研究内容の「対話」について、あまり深い考えをもっていなかったことがうかがえるが、1学期（5、6、7月）の支援から「対話」についての理解や対話に対する新しい知見の広がりがあったことがわかる。2学期以降、得た知見を自分なりに授業に落とし込み、深い学びに向かう対話的な学びを意識した授業改善につなげている。研究授業後は、実感を持った形で「対話」に対する考えを自分の中で確かなものに行っていることがうかがえる。研究を終えた時点での考えからも、今年度の双葉中学校の校内研究が、「対話」について、教師の考えの変容をもたらす研究となったことがわかる。

今年度実施した学習会や拡大校内研に関わる様々な支援や、各回の校内研究会へのアドバイス等を通して、研究主題の実現につながる校内研究支援を行うことができたと考える。

しかし、このような変容が双葉中学校の教師全てに表れているかと言われると難しい部分がある。これからの支援に向けて、いかに教科の壁を越えて、授業改善につながる支援を作っていけるかが課題となる。

#### 4 研究の成果として

- ・前年度の課題を踏まえた継続的な研究をすることができたので、先生方一人一人の校内研究に対する意識の向上につなげることができた。
- ・学習会を通して、対話の土台づくり（安心安全なクラス環境・集団づくり）の意識を高めることができた。
- ・教科学習会を通して、主発問や対話をどう仕組むのか、生徒の課題を把握するために分析結果を生かそうとする意識を高めること（経年的な課題を定期試験に入れるなど）ができた。

#### 5 研究の課題として

- ・今年度は、学校と検討する中で、教科を限定して授業改善の支援を行い、一定の成果を得ることはできたが、直接支援していない教科については授業改善の状況の把握が不十分で

あった。来年度以降は、学校全体で授業改善を進めるための支援を行っていきながら、それぞれの教科につなげられるような支援を行ってきたい。

- ・振り返りシートの有効性を高めるために、振り返りの時間を校内研の中に位置づけるなど、活用方法について検討したり、先生方の記述に対して、本センター指導主事が必要に応じて助言を行ったりする必要がある。

#### 6 来年度に向けて

- ・来年度も研究推進校とより一層共通理解を図り、校内研究の支援を進めていく。
- ・本センターのシンクタンク機能を生かし、研究推進校が研究したい内容に沿った学習会等の提案をする。
- ・振り返りシートの活用を形骸化させず、全体で振り返りの中で、教員の授業改善をより具体化する。

#### 【研究推進校】

甲斐市立双葉中学校

校長 興石 信

#### 【山梨大学データ分析WGメンバー】

山梨大学	教授	大隅	清陽
山梨大学	特任教授	中込	司
山梨大学	教授	田中	武夫
山梨大学	教授	齋藤	知也
山梨大学	教授	清水	宏幸
山梨大学	准教授	安藤	大輔
山梨大学	准教授	山際	基

#### 【総合教育センター研究アドバイザー】

教育研究推進幹	重田 誠
主幹・指導主事	藤巻 理恵

#### おわりに

中学校チームでは、今年度の研究に対する取り組みを通して、推進校の先生方に「主体的・対話的で深い学び」の視点を明確にした授業づくりを行うことの意義を伝えてきた。授業づくりに関わる具体的取り組みや振り返りシート等の活用を通

して、双葉中学校の目指す対話的な学びを取り入れた授業改善の一助になったと考えている。来年度は、研究推進校が新たに決まるが、双葉中での2年間の研究を生かし、授業改善を意識した授業づくりの支援を行っていきたい。